

特 251

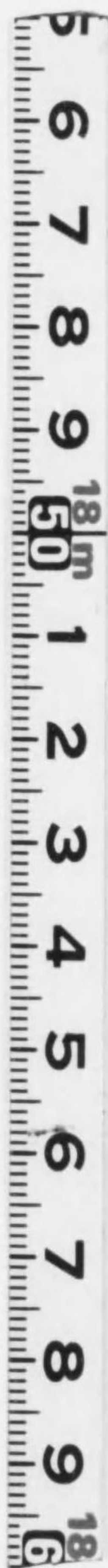
767

3

日本の雜誌

野間清治氏

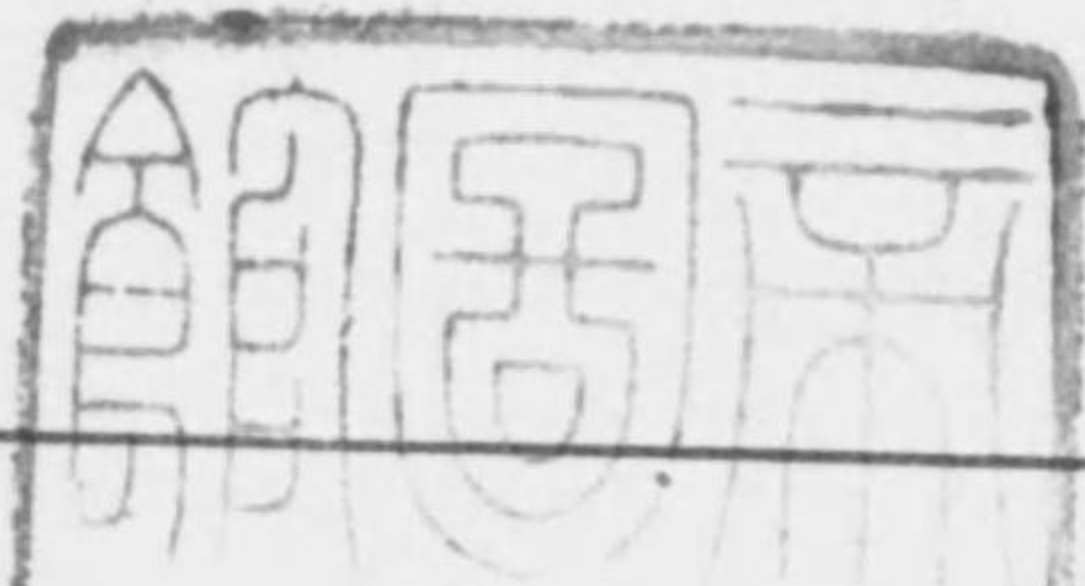
その経歴と人物と事業



始



特251  
767



日本雑誌王

野間清治氏

その経歴と人物と事業



大日本雄辯會講談社發行

寄贈本



野間清治氏



日本の経済

野間清治

その思想と人評と事案

寄讀本



大日本誠實會編輯部

## 序

此の小冊子の内容は、もと、東京のジャバン・アドヴァタイザー紙に連載記事として發表されたもので、同紙の有名な寄稿家サンタロー氏（秋元俊吉氏）の執筆にかゝるものである。我々はその記事を、本書に再録することを快諾された同紙の社長並びに執筆者に對し感謝の意を表さなければならぬ。尙ほサンタロー氏は本書のやうに永久的體裁を備へた書冊たらしむべく原文に筆を加へて下さつたことをも附記しておきたい。

我々は、また、次の事實を特筆しなければならない。野間清治氏は、この記事を通讀して、最初のほどは躊躇つて居られたのであるが、我等の切なる懇請を容れて、漸く、氏の「ものがたり」を再び印刷に附することに同意して下さつたのである。

野間氏は、外人間に多くの友人知己を持つて居られる。そこで、さうした人々に對して、ま

た、氏の姓名だけを聞き知つてゐる人々に對して、此の小冊子がきつと興味を喚起するであらうといふのが、本書出版の理由である。

いふまでも無いが、大日本雄辯會講談社といふ一團を中心にした氏の熱烈な讚美者である我々社員にとつて、野間氏は、謂はゞ神に近い崇敬の目的物である。それ故、我々自身が筆を執つて氏の人格を描出したとすれば、本書以上にもつと感激に充ちたものが出来上つたことであらう。併し何にしても、本書は、氏に對して友情を有つてはゐるが極めて公平な、觀察者の手になつた一篇の人物記である。さうした見地からして、少くとも、日本の雑誌王野間清治氏の一面を紹介してゐるものと云ふことが出来ると思ふ。

千九百二十七年十二月十七日 東京市本郷區駒込坂下町四八

大日本雄辯會講談社編輯部

淵田 忠良

## 日本の「雑誌王」野間清治氏

原著者 秋元 俊吉氏

### 第一、巨人の輪廓

◇山を登る人と眺める人



「雀は鷺の心の深さを測り知ることが出来ぬ」(燕雀安んぞ鴻鵠の志を知らんや)と支那の古典に於て或る古英雄が云つてゐる。人類の世界には、鷺も居るであらうし、雀も居るであらう。私は、偉人とか女丈夫とかの傳記を読む毎に、其心は我々の生活範圍とは全く違ふ世界に居る人間に於て或るやうな感じがする。私は今、一體、此の書の主人公を、讚美すべきか、羨望すべきか、抑々これに肖らうと努むべきかに迷ふものである。偉大な精神は小さな精神を理解出来な

いと同時に、小さな精神も亦偉大な精神を理解することは出来ないであらう。大望を抱く者には、何等の功名心を持たないやうな卑屈な人間は分らないであらう。ところが、大抵の人々は、いくら功名心をあふられても、決して受けつけないものである。かういふ人達は求むるところ甚だ低く小さく、その態度があまりに謙虚なので、燃ゆるが如き功名心を持つてゐる人には、それがとても本當とは信じられぬのだ。これ等一般の人々は、見上ぐるばかり高い所へ登つて行くよりも、むしろ其の分に安んじ、つつましい克己の裡に幸福を求めようと努めてゐる。あたかも、元氣横溢した登山家が、一山に成功すれば更に又他の一山をと、愈々高く峻しい尖峯を極めようと絶えず想望するやうに、弱い小さい者は、あの高い峰をいつも下から見上げて、之を嘆賞しながら、平和な谷間をそゞろ歩きし、走り廻り、さうして遊び暮すことに満足してゐる。――

◇解 け 得 め 驚 異

私は、「新聞に關係してゐるもの」としての身分がら、種々の意味に於て偉大な人々――例へ

ば、國務大臣、富豪、あるひは産業、宗教、慈善、文藝、美術など各方面に於ける大人物に面會する機會を持つたが、それらの人々から直接に受けた印象は特異のものではなかつた。と云ふのは、彼等は、いつでも特にすぐれた話をするでもなし、態度にも容貌にも、さまで普通の人間と異つた點を示してゐないからである。併しながら（又恐らくは、それが尙更私の驚異を深める原因になるのであらうが）、時のたつに従つて私の心中の驚異は、すんずんその大いさを増して行くのだつた。――見かけはさして他の人々より秀でてゐる人々が、普通の人間のより別に大きくもない手足や頭に、すばらしい活動力と思想とを持つてゐるといふことは、一體どうしたことであらうか！ これはいつまでも私の心に解けない驚異である。

◇誰 そ、難 誌 王

私は近頃かうした經驗の一つに、遭遇したのである。それは實に肝を潰すほどの經驗であつた。さうして未だにその驚嘆から平常の心持に返り得ないでゐる。例へばそれは、沙漠を旅してゐる

時、足もとの砂地ばかりを見てゐた私の眼が、フト前方を見上げると、驚くべし、そこには空高く聳え立つピラミッドがあつた——といった感じである。

此の人——野間清治氏については、私も數年前からその名を聞いてゐた。ところで、最近得た長時間の會見に於て彼を見、彼と語り、さうして彼の類ひなき大事業の性質を多少知ることが出来た結果、凡人ばかりの今の世界に珍らしい大人物が存在してゐるものだといふことを私は確く信するに至つた。

彼は巨人である。外國人には比較的知られてゐないがそれは、その經營する事業の性質の然らしめるところであるが、彼は、日本の人氣ある雑誌書籍の出版業者として特異な人物、日本に於て曾て類のなかつた人物である。

彼の各種出版物の發行高は殆んど信じ難いほどだ。その月刊雑誌の一つ「キング」はいつも百五十萬部の賣行を示してゐると云ふ。なほ、彼はその他に八種の月刊雑誌を發行してゐるが、そ

の全雑誌の讀者の總數は千萬人を超えたと見積られてゐる。即ち、日本人の五人に一人は、彼の雑誌の讀者である譯だ。が、此の龐大な數字が果してどの點まで正確であるかどうかは兎も角として、彼が日本の雑誌業界の「キング」であることは、實際目睹し得る證據がいくらかでもある。何處か其邊の本屋に立寄つて何氣なく訊ねて見給へ、日本の諸雑誌の總賣上高の七八割は、野間氏の講談社から發行されるものによつて占められてゐると云ふ返事を受けるであらう。北海道から九州へ、それから滿洲、朝鮮、臺灣、樺太に、更に、北米合衆國の、凡そ日本の國民が多少なりとも住んでゐる地域には、講談社の諸雑誌が、本屋の店頭陳列せられた雑誌の大部分を占めてゐる。

一つの人気ある雑誌を編輯し發行するだけでも、一人の人間の全身の勢力を傾け盡さねばならぬであらうとは、何人も想ふ所であらう。然るに茲に一人の出版業者があつて、九大雑誌を發行し、しかも全日本に互る各雑誌店をして、最も控へ目に見積つても、その全販賣雑誌の半數以上

を自分の發行する雜誌で充たしめるといふ事實、この事實を聞いては、誰しも、彼ながどん人物であるか、一體どんな具合に事業を經營してゐるのであるかを知らんと欲せらるゝであらう、尤もな事である。そこで、私はこれからその人とその性格と、その事業の一斑とについて多少紹介したいと思ふのである。

## 第二、大量生産の威力

### ◇文壇の黒幕

一般讀書界は、概して、作家に對するほどの注意を、出版業者に對しては拂はないものだ。それは丁度、劇場の観客が、舞臺上の装置や演技の背後に監督や脚本家が居ることを忘れ勝ちなのと同じ心理状態である。だから、有力な出版業者の經營法や人物を覗いてみるのも、亦一つの興味あることであらねばならぬ。有力な出版業者は、文學者仲間には十分知られてゐるが、實は、文壇の背後に身をひそめた黒幕のやうなものである。野間氏は、今迄に出版された最良書の發行

者であるとは言はぬまでも、現代文學物の最も大量の生産者であることは確かである。

### ◇一頁廣告の創始者

彼の専ら力を入れるところは大量生産にある。男にも女にも子供にも、あらゆる種類あらゆる階級に亘つて讀まるべき萬人向きの讀物に力を注ぐのである。彼は、日本に於て遙かに群を抜く最大量の紙及びインキの消費者だ。彼が、毎月、幾噸の紙を、何ガロンのインキを使用しつゝあるか、私は知らない。さうした彼の營業の詳細へ這入つて行くことは、現今、私の目的とするところではない。彼はこれ迄に幾多の書籍を出版して來た上に、現在九大雜誌を發行しつゝ今後も尙一層斬新な一層大きい刊行物を出さうと企てゝゐるといふことだ。

數年前、出版事業は、やがて行詰りとなつて出版業者は續々破産するであらうと思はれた事があつた。さうして雜誌出版業者の間に會議が開かれ、彼等相互の擁護のために、彼等の盡し得る能力の最大限に達したと思はるゝ雑誌廣告の大きさを制限した方が得策だといふことになつた。



しかし、一頁廣告の創始者であり、従つて、此の致命的な廣告戦の發頭人であつた野間氏は、此の會議に参加することを拒絶した。

かくして、競争は愈々猛烈になつたのである。今日では大新聞紙上に、折々一頁全面の、時には二頁全面の、人をアツと云はせるやうな大きい雑誌廣告を見ても、さして目新らしく感じないやうになつてゐる。野間氏は、かつて、その一雑誌を一回發賣するに當つて、宣傳費として三十萬圓も費したことがある。彼は「廣告すればきつと其効がある」といふ新しい信條を危いと思はるゝ程に信じきり、さうしてその信條をドシ／＼實行するものだから、競争相手はびつくりもし、恐れもしてゐる。毎年、否毎月、彼は讀書界に新しい愕きをひき起し、さうして今に野間氏は失敗するだらうと言つて居る人達の豫言を裏切つて、益々榮え行くやうである。

#### ◇晝寝て夜働く

彼に關する一般の評判は區々である。すべて何か大規模の事業をやつてゐる人々に對しては、

獨特な經營法と、それから奇矯と迄は云へぬにしても、非凡とでも名づけたいやうな性格を持つてゐるものやうに、誰も想像するものであるが、併しかゝる種類の人が實際あらうとはちよつと考へられない。ところが野間氏は曾て一度も事務所へ顔を出したことがない。ズツと引續き家庭に閉ぢ籠り、まるで梟か猫のやうに晝寝て夜働いてゐる。さうしてその堂々たる邸宅の門扉は、訪問客に對して常に閉ざされてゐるので、あたかも貸家のやうな趣がある。日中、一般の實業家にとつては執務時間である時に彼が若し起きて居るとすれば、彼は彼の最も好む娛樂である擊劍をやり通す。彼は怒ろしく肉體的耐久力に富み、三日三晩一睡もとらずに過せる程である。その他、彼は買物巧者であり、資金調達に妙を得てをり、味方を作るのに恐るべき鬼才を備へてゐる。

### 第三、理想を説く

#### ◇彼の風采

彼に面會する事はかなり困難であつた。野間氏のやうに多忙な人は世間に一寸あるまい。私の願ふところは、ゆつくり面會して本當によく話合ひたいと云ふにあつた。ところが紹介状を送つてやつてから殆んど二ヶ月も経つてやつと彼に面會することが出来たほどである。しかし、かうして一度會つてみれば、それが縁になつて、彼に會ふことを再び許され、三度許され、かくて私は彼の内面に潜んで居る性格の幾分かを親しく感得したつもりである。

野間氏から私の得た最初の印象は、軍人とか、學校の先生とか、何處かの中學の校長と云つたやうな、凡そ實業家から受ける印象とは遠くかけ離れたものであつた。彼は、偉丈夫の風采、普通の日本人に比べて抜群の體格を備へ、頭は大きく、眉太く秀で、鷲のやうな眼、さうして密生した胡麻鹽の口髭。ホンの一寸一瞥しただけで、彼がその頭腦中に何か大きいことを考へてゐる人であることが分る。その顔は、何處か西郷隆盛の顔に似てゐないでもない。年齢は凡そ五十歳ぐらゐであらう、かうした人としての理想的な男盛りの年頃にあつて、しかも人品骨格、その事

業と名聲をいささかも裏切らない。彼の頭の頂から足の先まで、闘士としての面目が躍如としてゐる。しかし、その音聲は、穩かで、對談者にある和やかな感銘を與へる。彼の鼻指は、あたかも式部官の如く慇懃に物柔かで、その十分に調へられた語調と洗煉された措辭には、チエスタアフィールド型の巧妙さが明かに看取される。野間氏は話術のくろゝとである。

#### ◇讀書の民衆化

「會てわたしは聞きました。」と彼が云つた、「あるアメリカの出版業者が一つの雑誌に百萬部の發行高を得てゐると云ふ話。それに刺戟されました、我々だつて、日本でそれと同じ事が出来なわけがない、と、かう考へたのです。それがわたしの出發點でした。それがわたしの強い信念でありました、確信でありました。さうして只今ではわたしは、日本國民は雑誌に對する無限の讀書力を持つてゐる、たゞ開發されてゐないだけだといふことを知り得て愉快に感じてゐます。」

會ては讀書が務めであり、勉強であり、教養の高い人々の氣晴しであつた。が、一般民衆にとつては、娯しみに書を繙くとか、學校教育の不足を補ふ爲めに讀書するなど云ふことはなかつたのです。一つは、さう云つた目的の爲めに編輯された萬人向きの雑誌が存在しなかつたのにも依るのであるが、よしんば存在してゐるにしても、充分よく廣告されなかつたのでした。

日本のやうな國では、假名のお蔭で、教育を受けてゐない人々でも、ある點までは讀書が出来るので、雑誌をさへ十分興味多いものにして廣告を十分したら、きつとそれらの人々にも雑誌を読ませる事が出来るのは明かだつたのです。」

◇偉大なる日本を作る

「あなたが讀者の間に宣傳しようとなさつてゐる主義教訓とでも申すべきものが、若しありとすれば、どんなもので御座いませうか？」と私は訊ねた。「あなたの御事業の指導精神は何ですか？あなたは非常な勢力を持つていらつしやる。その用ひ方によつて善にもなり、惡にもなります。」

野間氏「そのことは、私もよく承知してゐます。わたしは果さねばならぬ使命があるやうに思つてゐますので、甚だ僭越な言ひ分かも知れぬが、絶えずその使命を全うしようとして努力してゐるのです。」

「失禮ながら、その使命とはどんな事でせうか。」

野間氏「一言で云ひますと、日本を偉大ならしめる、といふことです。こんなことを申せばお笑ひなさるかも知れませぬ。舊弊な、現代離れのした奴だと、お考へなさるかも知れませぬが、わたしは深い學問とてなく、殊に西洋文明についての知識は持つてゐませぬ。わたしは外國語がわからないから、したがつて西洋に關する私の僅かな知識は、日本譯の書物から得ただけのもので、わたしの教養と云へば、主に支那や日本の古典から受けたものです。ですからまだ、學ばねばならぬことが澤山あり、もつと勉強したいと思つて居ます。しかしながら、今のところ、わたしは、自分の古い信念——即ち私の青年時代に私を導いた精神を捨てようとは思ひませぬ。わたしは、小學校の教師として、身を立て始めました。で、教師として物を考へることが習慣とな

つて、今も尙、頭に固くこびりついてゐます。」

◇所謂偉大の意義

「何故といふことは出来ませぬが、より偉大な日本といふ主義をわたしは信じてゐます。日本人は各々、まづ第一の義務として、職業の如何を論ぜず、一個の偉大な人間になり、それに依つて我が國の偉大に貢獻しなければならぬ、とかう思ふのであります。」

「あなたの仰つしやる偉大とはどういふ意味でせうか？」

野間氏「わたしの考へは單純です。偉大な日本人とは大望——盡忠報國の大望に燃える人であり、言葉を換へて云へば、親には孝、君には忠、朋友には信、仕事には誠實、意志は強固、さうして闘ひには勇であるのが、即ち偉大なる日本人であります。」

今申したことに少しも新しいものは無いではありません。しかし、これが、わたしの雑誌に關して、わたしの胸奥を支配してゐる主義であります。マア一度、わたしの九雜誌のどれでもよろし

い、手にとつてその頁によく眼を通して讀んで見て下さい。「頁たりとも、それを陋劣な記事に費して此の主義に矛盾するやうなことはしてゐない積りです。どの雑誌も、全誌面を擧げて、あらゆる種類、あらゆる型の英雄の物語——戦争の英雄、平和の英雄、有名な劍士や將軍、大詩人、文豪、美術の巨匠、名工、孝子、忠臣、聖人、賢者、女傑の類の物語を満載してゐます。と云へば、野間といふ男は、なんと云ふ「偉大崇拜癖」の強い男だらうと仰しやるかも知れないが、或ひはさうかも知れませぬ。」

さて、偉大なるものの基礎は、わたしの考へでは、親に孝、君に忠であります。わたくし達はそこから出發せねばならぬ。これが西洋の所謂「奉仕」に該當するものではないでせうか。日本の青年男女に忠孝の大義を宣傳し、偉大にならんとする大望を彼等に鼓吹することこそ、わたしの雑誌の目的であり、而してこの目的に向つて、わが社の全社員は一致協同、全力を擧げて努力してゐるのであります。」

◇教育の體驗を其儘

「かうした徳性は、なるほど、學校で教へられてゐます。併しながら、それはわたし個人の經驗からよく存じてゐることですが、學校で與へられたる教訓といふものは、教壇の上から全く無味乾燥な方法で與へられますから、往々所期の効果を壞して了ふことがあります。子供は、お説教を好まない。しかし、面白い物語はどんなに喜んで聞くことせう。

むかし教師だつた時、わたしは、少々自慢を申上げて済みませんが、生徒間に人氣がありました。それはどういふ原因によるかと云ひますと、わたしがいつも何か興味を引くやうに教へてやうと努めたからだと思ひます。たとへば武士とか徳の高い偉人とか等の話を云つて聞かせ、決して乾びた歴史年表のやうなものを子供の頭へ詰め込んだり、むづかしい教科書そのまゝに、通り一遍の説明を加へて済したりしませんでした。

こんな具合にすれば、子供と云ふものは、大切な修身の學科を十分面白く會得するものです。

成人教育にも、ある點までは同じやうな方法が施されようかと思ひます。わたし達は、自分達に最も興味深いものから、最もよく學びます。教訓を、興味深く、とても面白くてたまらぬやうなものにするのが、教師や作家のねらひであらねばなりません。さうして、それはとりも直さずわたしの雑誌のすべてが目指してゐるところであります。

かう申せば、三十年前わたしの抱いてゐた教師としての精神が、今も尙わたしを指導してゐるといふことがお分りになります。

◇世界へ乗り出すには

「近年、わたしは」と彼は語り續けた。「あの高尚な國際的理想論、即ち、世界の平和と友愛を叫ぶ大運動についていろいろ聞きます。さうして、かうした大理想に鑑みれば、わたしの思想などは兒戯に類してゐるかも知れませぬ。しかし、わたしの眼には、日本はまだ凡ての點に於て、世界の真中へ乗り出し、自分自身の持つ偉大さで他の國々を裨益する地位までに到達してゐないや

うに見えます。日本はまづ第一の義務として、自分の聲を聞いて貰へるやうな地位に到達せねばなりません。まづ自分の裡にあるものを發展させ、自分の持つてゐるものを十分利用しなければなりません。

それには、東洋文化の裡にも、うまく鹽梅したら、國民に有益な道德の糧を供給するものが必ずあると信じます。一寸した單純な行狀訓でも、十分理解して實際に行ふなら、外から仕入れた倫理とか外國の宗教々理の體系を鵝呑してゐるより、どれほど結構か知れませぬ。一般の民衆に向つて、日常の行爲を道德原理で律しさせようなどと思つては無理です。彼等は、まづ行ひ、それからやつと考へる。それに、彼等の行狀の動機は、概して、物語の中とか或は實生活中に於て、敬慕してゐる誰かに肖らうとする心から、迸り出るものです。」

#### 第四、内省の述懐

◇現代の青年を見よ

此處で、私は、偉大と大望について、彼の説くところと異ふおはこの持論を述べた。

「御尤もな御意見です。」と彼は答へた。「あなたの御心の謙虛なところが、よくあらはれてゐます。しかし、年齢もゆき分別も盛んなあなたに當嵌められるやうなことを、其のまゝ今やつと人世の戰場へ出たばかりの若い人々に向つては適用されませぬ。わたしの若い頃には、どの青年も、みんな、まるで大望の權化のやうでした。帝國第一の男になりたいと、日夜とてつもない夢を見てゐたものです。近代日本がこんなに偉大になつたのも、本をたゞせば、どこ迄も偉大を追及して行つた此等の青年に負ふところが多くありはしないかと思はれます。」

然るに、今日の青年、たとへば大學生などはどうでせう？ 彼等はどうも元氣と熱心とに缺けてゐるやうに思へます。彼等の唯一つの大望と云へば、どんな職業にでもいゝ、ありつきさへしたらといふにあるやうです。いや、甚だしきに至ると、給仕の仕事をして總理大臣の俸給が得たといふのだから困ります。一口に云ふと、樂がしたいといふのが、彼等の人生のモットーであるらしいのです。さて、こんな時代に於て、青年に向ひ、偉大崇拜と強烈な向上心を鼓吹する

わたしが間違つてゐるでせうか？」

◇失意の巻を彷徨うて

と云はれて、筆者は、ぎやふんと参りました、と言明した。この通り、彼は實業家らしくもない、教育家の如き風格で語るのであつた。野間夫人、それは古典型の婦人で、上品な、まだ四十年代の夫人が、時折はいつて来て、我々の座談に加はつた。折々彼女の夫は、夫人の方がよほどよく知つてゐるやうに思へる問題へ話に移つて行く毎に、夫人の方を顧みて其意見を求めるのであつた。

「あなたの奮闘的生涯に於て、曾てお遭ひなかつた最も苦しい御経験は何でしたか？」と云ふのが私の第二の質問であつた。

「何だつたかなア？」と彼は夫人の方を振り返つて見た。と夫人は、チイツと首を垂れたまゝ深い沈黙を守つてゐた、それはあたかも無限の意味を含んでゐるものの如くであつた。「わたしは、何

から話していか、あんまり澤山に大きい苦しみを經て來てゐます。しかし、その時は云ひやうもなく辛いと思つた事でさへ、反省して見れば、靜かな悟りの氣分になるものであります。何故かといへば苦しみと云ひ、樂しみと云ひ、すべては皆、たえず絡み合ひ、いはば、夜に晝を次ぐやうなものです。例をとつて云へば、その當時わたしにとつて何にも増して苦しかつた経験があります。それは丁度、東京の街々を歩き廻つて、わたしの最初の雑誌「雄辯」を引き受けて呉れるべき出版業者を探し求めてゐた時のことでした。どの出版業者もみんな、わたしのたつての願ひを、いなく拒絶しました。わたしは非常な努力によつて集め得た原稿を持つてゐたのです。さうして、自分の計畫を素晴らしいものだと考へてゐました。しかし誰一人としてその原稿に一瞥をもち與へようとしませんでした。わたしはつまらぬ一介の書記、資金もなければ、友もなかつたのです。毎日々々空しい彷徨を市中に續けてゐました。

と、ある日のことフト這入つた自動電話の箱の中で、電話帳の頁を、くり擴げて見ました、見込のありさうな出版所を探す爲めだつたのです。わたしは手當りに一つ選び出して、銀座のその

會社へたづねて行きました。さうして其處の支配人に面會し、熱誠を籠めて頼みました。恐らく今度も「御断り」と來るに違ひないと、實は覺悟をしてゐたのです。すると、どうでせう、驚くではありませんか「宜しい、御引受けませう」と云ふ聲。その時の嬉しかつたこと。今までの胸中の鬱もすつかり消えて、始めて明るい氣持になることが出來ました。

それから一年の後「雄辯」の經營がわたしの手に移つたのでした。しばらくの間は、得意の口が續きましたが、やがて經營困難の暗い口がやつて來ました。それから、照る日、曇る日、と云つたやうに續いて行きました。

#### ◇自らを賣むる苦

しかし、すべて此等の事はわたしの修練の一部に過ぎませんでした、どんな事業にたづさはつてゐるにしても、凡ての人が、多かれ少なかれ堪へねばならぬものは修練であります。たゞ私が今なほ胸を掻きむしらるゝやうに思ふ、世にも苦い經驗と申しますと、その昔放蕩の限りを盡し

たり、他人をやたらに困らせたりして、あたち青春を浪費したことです。肉體が強壯なるにまかせ撃劍が巧かつたのに慢心して、私は人と争ふことが好きでした。わたしは多くの人々を打ちのめし、酒をあびるやうに飲みました。さうして、何か東洋風メロドラマにでも出て來る豪傑氣取りでゐたのだから堪りません。さうして、わたしは戀をしてはよくない女たちと戀に落ちたりしました。かくてわたしは意氣昂然として歩き廻り、無方圖に食ひ飲みし、あるひは又、亂暴狼藉に振舞ふなど、教育家といふ高尚な職にふさはしからぬ行ひをしたものでした。かういふことを思ひ出せば思ひ出すほど、わたしの胸にかぎりなき苦みを與へます。

さいはひ、今日では、ある點まで、この惡癖を矯正することが出來ました。わたしはもう可なり以前から酒を飲むことと、腹を立てることを止めて了ひました——思へば、この二つのことが、わたしの青年時代の榮とでも云ふべきものだつたのですが。



## 第五、過去を語る

### ◆愛 蔵 の 一 家

野間清治氏は群馬に生れた。由來、群馬は、明治史上に大人物を一人も出してゐないと云はれてゐる。彼の母方の祖父は有名な學者であり劍士であり、會津藩の分家たる保科家に師範として仕へてゐた。千八百六十八年、維新の變に薩長と會津との戰に於て、彼の祖父と二人の叔父が戦歿した。野間氏の父は、劍道の達人であつたので維新後、桐生に於て門弟を集めて教授した。清治氏も幼年の頃は門弟の間に交つて稽古したのである。それだから清治氏がその學生時代に於て劍道の技、群を抜き、七個のメダルを得たほど、常に優勝を續けてゐたのも偶然ではない。

明治初期の歴史は、薩摩や長州其他の勤王黨の勃興史である。それは反面に於て、反對黨の非運を意味してゐた。野間家一族も、この運命の支配を免れなかつた。極度の貧困が彼等の家庭を襲つた。夏の夜など、肉體を保護する一張の蚊帳さへ持ち合さなかつたといふ。彼の母は、その

父と兄弟の悲劇的な死を眼のあたり見てゐたところから、彼に對して先祖の武勇譚を絶えず話して聞かせては、彼の頭に、「お前が先祖を忘れたり、先祖の名を辱しめぬ大人物にならなかつたら、それこそ先祖に顔向けがならない。」といふ宿命的な教訓を刻み込ませたのであつた。かくて、大望が、彼の若き性格の基調となつて了つた。

### ◆少 青 年 時 代

十五歳にして小學校を卒へた彼は、東京の幼年學校（陸軍士官の準備學校）へ入學しようとしたが、當時の彼の體格は、病身が災ひして、その入學を許可されるほど強健でなかつた。そこで、國へ歸つて、郷里近くの村の小學校に代用教員を勤めた。その後、師範學校へ入學した。此の學校は、卒業後の數年間を教師として働くべき義務を負はせるだけで、全然官費であつた。彼は順當にその學校を卒業して、小學校の正教員になつた。二十五歳の時、東京へ出て來て、帝國大學の臨時中等教員養成所へ入り、そこを卒業して中等教員の免狀を獲たのである。

彼はすぐに、沖繩の中學に國漢文の教師として赴任した。さうしてそこで三年近く働いた。彼が呑気な放蕩を少々やつてのけたのは、金銭がすこし自由になつた此の時代である。三十歳にして、現夫人、野間佐衛子と結婚した。それは珍らしい方法で結ばれた婚姻であつた。彼の奉職する學校の校長が、偶々上京するに際して、若しお嫌でなかつたら君の細君を一人見つけて連れて歸るがどうかや、と彼に語つた。彼は承諾した。しかもどんな女を連れて來られても結婚します、とさへ約束した。そこで、校長は、歸任の途中、四國へ立ち寄つて、ある小學校の女教員達の間から、野間氏に適するだらうと思はれる一人を沖繩へ連れ歸つた。結婚は運よくいい結果を生んだ。さうして、彼等は今日に至る迄、偕老の契を結んだことを悔ゆる理由を少しも持つてゐないのである。

かくして、野間氏は、その教師出の細君を迎へて、自らは、師範であつた祖父と父との後を受けて三代目を繼いで純然たる教師であつた。彼等は、結婚後いくばくもなく、或る先生から東京帝國大學の書記に缺員があるから、その後任となつてはどうかと云ふ勧告を受けた。最初、彼は躊躇した、しかし頻りと促されるまゝに決心して沖繩の地を後にした。それが艱難の始まりでもあり、又ひいては今日の盛大なる状態に彼等を導いて來た原因となつたのである。

「あなたは、その時、沖繩を去られたことを後悔なさるやうな事はありませんか？」と私は訊ねた。「あるひは又、今尙教師でいらしたならば、今後出版業者として果たさうと思つて居らつしや心、その意義ある義務に優るとも劣らぬ良い仕事を、爲さることが出來たらうと思ひになりますせんか？ それとも、一生涯教師をなさつてゐるよりも、現在の方が幸福だと思ひになります

か？」

これは或は少し失禮な質問であつたかも知れぬ。野間氏はしばらく考へてゐるが、やがて稍々控へ目な聲音で云つた。「概して申すと、わたしは教師をしつづけてゐるよりも、現在かうしてゐる方が、幸福だらうと思ひます。なるほど、わたしは教育家としても多少目立つたことをなし得たかも知れませぬが、しかしそれは疑はしいものです。わたしはヂツとして居られぬ性でした。さうして、今考へて見ますのに、わたしの氣質は、どうも教師向きではなかつたやうです。

わたしは功名心が盛んに燃えてゐました。沖繩には、わたしの旺盛な元氣を働かすだけの餘地が十分になかつた。それが原因して、するぶん馬鹿なことをやつてのけたのです。數知れぬ失策を仕出かしたのです。だから、教師をしつづけてゐましたら、あるひは、神聖な職業を汚して了つたかも知れないのです。わたしは現在の仕事を喜んでやつてをり、さうして、いくらか善い事をして居ると自分では思つてゐるのですから、將來は兎も角として、現在の人間の中で、最も運命にめぐまれた、最も幸福なものはわたしであると思へます。」

#### ◇熱烈なる雄辯家

野間氏夫妻は、上京してから、新しい生活に入つた。彼等は下谷に小さな二間の二階を借りて住んだ。毎日、彼は帝國大學へ通勤するし、夫人は或小學校に教鞭を執り、さうして、夫妻が得る俸給の半を以て二人の生活を支へ、其餘を貯蓄したのであつた。さうしてゐる中にも、彼の心の奥には或る大望が烈々たる焰を燃やしてゐた。その結果は、遂に彼に雑誌「雄辯」發刊の計畫を思ひ立たせるに至つたのである。彼は常に雄辯術の熱烈な研究者であつた。さうして、首都に於ける政治界の成行を凝視するにつれて、「現代に於ける偉大性の要件の一つは、演説を立派にやつてのける能力であらねばならぬ。」といふ確信を、益々鞏固にした。彼は、如何に熱心に大隈を、尾崎を、犬養を聞いた事であつたらう。さうして、「我が一生の使命は、雄辯家を創るにある。」といふ自覺を持つに至つたのである。その結果として「雄辯」は生れたのであつた。

そこで、彼は大學書記の職を抛つて、團子坂に小さな家を一軒借入れ、そこを新雑誌の事務所とした。此處に多くの若きデモステネスが集まり、野間氏はその大將となり、指導者となつて、盛んに雄辯術を錬磨したのである。

出花の小さい成功を祝ふ輝かしい日が續いた。その頃、彼は故大隈侯に見えることが出来て、侯から激勵の言葉を聞いた。侯は言つた、「明治維新の偉業は青年の手に依つてなし遂げられた。日本の將來も亦青年の上にある。だからして、君が現在の此の潑刺たる精神をどこ迄も保ち續け、青年の爲めに、さうして青年と共に、盡力するならば、君は必ず成功するであらう。」と。この言葉を、野間氏は決して忘れなかつた。現に彼の社には、二十歳未満の少年従業員が二百五十名以上も居る。彼はどこまでも青年の友たるであらう。

## 第六、變つた經營ぶり

### ◇「偉大」の使徒

思ふに、野間氏は、功名心の生み出したものであり、「偉大」の使徒である。さうして愛國が彼の宗教である。曾て彼は近所の大邸宅を羨ましげに見上げて或る友人に云つた、「いつかきつと、あんな家に住んでみせる。」と。今日彼は美しい廣大な邸宅を持つてゐる。それは彼が住んでゐる音羽のそれで、東京に於ける最も著名な邸宅の一つであるといふ。そのほか、田舎に二つ三つ別荘を有つてゐる。それから彼は東京市の多額納税者中の三四位にある。「われに權勢を與へよ、然らずんば名聲を、然らずんば黄金を！」彼は曾て二十年前、大學書記をしてゐる時、日記にかう書きつけた。彼は、今、とにかく、それらの中の一つへの途上にある。

雑誌報國の念願から計畫した彼が最近の功績と云へば、「キング」附録「明治大帝」の發行であらう。それはキングの二倍大であり、その賣價が、又どんな素人が見ても、紙代と印刷代にも足

りまいと信ぜらるる程の廉價である。

◇三 大 社 是

私は、野間氏に向つて、その經營ぶりについて、殊に使用人、廣告、及び多數の寄稿家への支拂ひ其他について、何か語つて貰ひたいと云つた。彼の、廣告やその他雜誌經營に關するいろいろな問題の話は、多少専門的なところがあつたので、大部分、私には解らなかつた。

「經營の實際に當つては」と彼が云つた。我々は三つの社是を持つてゐます、それによつて、我が社の者が、みんな一つに堅く結合されてゐるのです。その三つの社是は漢語から取つたもので、すから、英語には譯しにくいのです。その第一は、我々がコンセン・イツタイ（渾然一體）と呼ぶものであつて、「完全な共力」といふ以上の意味をもつてをり、字義通りでは、「肉體は數多いが魂は一つ」といふ意です。第二はセイジツ・キンベン（誠實勤勉）即ち「誠實と勤勉」であり、第三はジユウオウ・コウリヨ（縱横考慮）であります。謂ふところの意は「深い考慮」が稍よ

當るに近いでせう。

此等の社是をこれ迄に創り上げるのに三年かかりました。我々にとつては、これらの言葉は、他人が考へられるよりも、もつともつと遙かに深い貴い意味を含んでゐます。あなたはわたしの仕事を、大事業だ、殆んど不可能に近いものだ、とさへ云はれた。わたしも亦わが全協力者から現在享けてゐた有難い援助と協力を得られなかつたとしたら、この事業は不可能であつたに違ひないと思ひます。實際、日本でも、外國でも、わが社ほど、社長と社員との間に完全な協調を持つてゐる商會、會社はありますまい。これは随分思ひ切つた自慢のやうに聞えませうが、私はさう思ひます。わが社が何か成功を獲たとするならば、その大半の譽れは四百の忠實な社員のものになるべきです。わが社の經營法について御質問があるならば、この點を特に力説せねばならぬと思つてゐます。」

◇講 談 社 の 少 年 團

大日本雄辯會講談社の事務所、或は野間氏の邸宅を訪ねたことのある人は、誰でも目撃することであらうが、粗い木綿の厚着を着た十五六から二十歳位までの少年社員が、まるで蜜蜂が巢の廻りに群つてゐるやうに急しく立ち働いてゐる。そして方圓とか受附で諸君を接待する少年社員の、その言葉遣ひや物腰が非常に丁寧で、動作が一體に氣がきいてゐるのに驚かされるであらう。彼等はいはゆる大日本雄辯會講談社の少年團であつて、その規律と教育については、野間氏は特に意を用ひてゐる。

「わたしは、社の能率の大部分について、これらの少年社員に大いに負ふところがあります。」と彼が云つた。「少年と雖も、やらうと思つて努め勵みさへすれば成年同様の能率を挙げ得る筈だと云ふ意見を、私は日頃から持つてゐました。わたしの體驗から申せば、さしたる學問がなくとも向上心に燃える人間の方が、學問があつても向上心のあまりない人間より、大きい成功をやつてのけます。毎年わが社は多数の幼い入社志望者中から若干名を採用いたします。彼等に求むる教育の點に於ての資格は、小學卒業者であればよろしいのです。彼等は、その各々が従ふ仕事

に於て、成年社員同様満足な成績をあげてゐることは、私の最も喜ぶ所であります。わたし達は彼等が働きながら自學自習するやうにやらせてゐます。現在、編輯部其他各部の優秀な主任の中に、この少年社員から登つて来た人が幾人も居ます。

此等の少年達が、いつ迄もわが社に留まつてゐて呉れるにしても、或は又、今後もつと自分の好きな仕事を求めて退社するやうになるにしても、どんな境遇に置かれても、どんな仕事をやるにしても、最善を盡して、どこ迄も努め勵むやうな人間に薰陶すべくわたしは全力を盡してゐる。

#### ○頭のひねり工合

野間氏はなほ語りつづけた。「我が社の日常の仕事ぶりは、自分の體驗に基いた獨得の方法で大體やつてゐます。それは恐らく西歐の實業家の用ひて居る正則の方法とは大分かけ離れて居るでせう。隆かに、わたしは實際上の問題になると、書物から得た知識を全然度外視してゐます。」

と云ふのは、そんな本なんか讀んでゐないからですよ。

わたしが最初の雜誌を自分の經營でやり初めた時、少しも經驗を持つてゐませんでした。印刷のことについても、紙其他の買入れについても、何にも知らなかつたのです。さうして經驗の無い悲しさに、いろ／＼辛い思ひをせねばなりません。要求された額だけ黙つて支拂ひました。ところで今では、ものを賣るのに術がある如く、買ひ入れるのにも、術があることを知りました。例へば廣告にしても、一つの本に數萬圓の巨額を費して何等得るところがないとする。然るに、ほんの一寸したこつと頭のひねり工合一つで、殆んど費用をかけずに、不思議なほどの好結果が得られることがあります。廣告、廣告と云つたとて、やたらに廣告するのではなく、上手な廣告を、好機を捉へてやる、といふのです。」

#### ◇ 特 選 委 員 會

「原稿の買入れについては、」と彼は言葉を續けた。「わたしは遺憾ながら、極く近年まで、方法も

講ぜず研究もせず、編輯者達の判斷に、幾分任せ過ぎた嫌がありました。所が此の事が重大な意義をもつ事を悟つたので、爾來、待遇委員會なるものを設け、各種の原稿に對して公正に偏頗なく支拂はれるやう協議する事にしました。作家により、情況に従つて、稿料の率は勿論違つてゐます。然し、社の内規として、古くからの寄稿家程稿料を多く支拂ふやうにしてゐます。新入社員についても、その才幹の如何にかかはらず、出身學校の別なく、まづ最下級から初めなければなりません。ですから、新しい寄稿家も、まづ最初は我慢をして貰つて最低の稿料でお願ひしますが、その寄稿が度重なるにつれて、稿料も上ります。この稿料の値上げといふことこそ待遇委員會のなすべき仕事なのです。これはわが社が古い寄稿家に對する正當な禮儀であると思ひます。

いろいろ研究した結果、わたし達はこのむづかしい問題について、かなり都合よく組織立つた方法を作り上げ、さうして尙よきが上にもよいやうに改良して來ました。わが社は驚くべき多數の原稿を要しますので、常にきまつて豊富に原稿の供給を受けねばなりません。我々はすべての寄稿を入念に閱讀しまして、若し立派な作品だと思つたら、たとへ今直ぐ使はないにしても買入

れます。昨年などは、謂はば、暗から暗に葬られる原稿を、金銭に見積つて二十萬圓程も買入れました。成程、その中の幾分かは他日發表されるかも知れませぬけれど、大部分のものは、不用原稿として葬られて了ふ運命にあるものです。原稿に對する金銭の支拂ひについても、いろいろ區別があります。時としては、原稿引換へに支拂ふものもあり、時としては作品を發表したとき支拂ふものもあります。大臣とか、大實業家などの寄稿については、お忙しくて筆を執つて貰へない、そこでお話拜聴に出掛けねばならぬ、したがつて筆記や訂正などの困難がかなり伴ひます。かう云つた寄稿に對する謝禮として、わたしの社は、現金でするかはりに、何か適當の方法で感謝の意を致すこともあります。」

#### ◇胸中の秘を披く

「將來どんな御計畫がありますか？」と私は訊ねた。

「たくさんあるので一寸ひと息では云へませぬ。」と彼は答へた。「實のところ、初めの中は、雜

誌を出すことばかりに夢中になつてゐたので、雜誌に載せた記事の或ものの善惡を考へる暇が十分なかつたのです。賣上を多くしたい爲めに、雜誌の内容を面白くするといふのが我が社の第一の問題でした。しかし、今日では、ある標準程度の販賣高を獲ましたので、今後雜誌の内容の改善に一層の大努力をしたいと心掛けてゐます。

まづ第一に洋の東西を問はず、あらゆる國々の古典を民衆化することに、今後一層の努力を致します。古典を読むといふことは、どの國でもある局限られた極く少數の教養ある人々の特權のやうになつてゐます。しかし、日常生活上、大衆にとつて贅澤だつたものが、急速に一般の必要物となりつつある際、文藝家及び詩人の作品のよいものを出版して、廣く民衆の手に與へる方法がある筈と思ひます。

もう一つ、わたしが是非やり遂げたいと心組んでゐることは、國際知識の普及であります。現在、ともかく我國では、國際問題に關する知識と云へば「堅い讀物」として取扱はれ、一般人の頭ではとても解らないものと考へられてゐます。勞働者や下級の使用人やが、海の彼方の事情を



知らないでよいでせうか。それと同時にアメリカやヨーロッパの話を、落語家や講談を聴くやうに面白く読ませられぬことは無いと思ひます。などと云つて、これからしようとする事業の機密を洩すやうですが、大丈夫、廣い舞臺のことです、出版者が幾人出ようとかまひません。」

◇常例の徹夜會話

かくの如く、彼はその事業の多方面について語つた。話がすこぶる大きく、引證される数字が甚だ巨大である。これによつて見れば、彼が現在經營してゐる事業が如何に大規模のものであるか、自ら解釋することが出来るではあるまいか。いつも家庭に閉ぢ籠つたまま、あらゆる仕事を編輯者及び營業部員に任せきつてゐるやうでも、彼は實際に於て、すべてに互り一々注意を配つてゐるのである。その事業の最も小さい些末なことにも眼を離さない。さうして、殆んどすべての重大な計畫は、まづ着手に先きだつて、「宜しい。」といふ彼の認可を経なければならぬ。時々、會議が開かれる。私が最初彼を音羽の邸宅に訪れた時、丁度會議が開かれようとする

ころだつた。凡そ四十名ばかりの人々が、彼の部屋に隣り合せた大廣間で、圓を描いて坐つてゐた。その會議は午後三時に初められ、さうして、後から聞いたのであるが、翌朝まで續行された。と云ふことだ。徹夜會議などと云つても、野間内閣にあつては、決して珍らしいことではない。新年號の雜誌の最後の決定を見る迄には、昨年夏、三十回も徹夜會議を催したといふことだ。さうして、かうした大人國の議會には、野間氏がいつも議長となり、よき聴き手となり、最後に到つて口を開き、討議中のもろくの問題の決裁者となるのである。

第七、家庭生活

◇野間夫人の内助

野間氏は、未だ會て、一度も、銀座あたりのデパートメント・ストアにはいつた事もなく、市内の劇場へ見物に出掛けたこともない。又、時々田舎の別荘へ行くのを除いては、一步も自家の門外へ出たことがない。さうして、不氣味な大蜘蛛のやうに、その蜘蛛の巢の上に坐つて、計畫を立

てたり、工夫を凝したりしてゐる。私には、彼の身分が左程羨しいものやうには見えない。その事業も、その富も、その勢力も亦同様だ。

彼の家庭生活について、私の眼に羨しく映つたのは、家長とその妻の間に、完全な理解と協力が存在するやうに見えたことである。彼のあるところには常に夫人がある。二人は互に「オー」と呼べば、「ハイ！」と答へられる所に居る。夫人は彼の愛人と彼の友と彼の看護婦とを一身に兼ねてゐる。否、それ以上だ。彼女は夫に代つて手紙を書いたり、事業に關して夫に助言したりする。野間氏は、大企業家の例に洩れず、時に敵を持つたこともある。さうして思ひがけない脅迫を受けたりなどした。それで、彼は夫人に對して、その事業や外來客との面談のすべてを内々知らせておく。さうしておけば、彼の言葉によると、彼が何時死ぬやうなことがあつても、妻を間誤つかせなくて済むからだと言ふのである。

自力と他力

「わたしの話は、自力で仕上げた男のやうな話振りでしたか？」と最後の面會の終り頃に野間氏が云つた。「若しそんな話振りをしたのだつたら、かう訂正せねばなりません。わたしは自力で仕上げたと云ひ得るやうに、又境遇や一族部下の他力が今日わたしを生出したのでもあるのです。わたしは、幸ひにして、偉い祖先や善良で見識を備へた母を持つて居りました。それから殊に、幸ひなことには、兄を思ふ念の篤い可愛い妹がありました。この妹こそ、わたし達の幼い日に、わたしが畏敬してゐたひとりの人であり、今も尙、畏敬し、感謝の念を捧げてゐる女性であります。それから、わたしが同じく感謝せねばならぬのは、わが社の、非常に面白いけれども、困難な雑誌業を經營して行くについて、全社員が満腔の熱誠を傾けた義侠的協力と、家庭に於ける敬愛する妻の貴い援助とを享有してゐることでもあります。」

小説 野間

野間氏には令息が二人あつたが、その一人はよほど前に亡くなつた。其の時の彼の悲嘆は云ひ

やうもないほどであつた。そこで、その形見として、新雑誌を發刊し、亡兒を勞はるやうに心を籠めて撫育して行つた。それが「講談俱樂部」であり、講談社の九雜誌の内、彼が特に愛してゐるものである。もう一人の令息野間恒君は、氏の嗣子であり、今十九歳の青年であるが、父君の名を恥かしめぬ後繼者と一般に認められてゐる。

野間氏は、從來さうであつた如く、今日も令息の教育については特に留意してゐる。恒君が小学校を卒へるや否や、氏は直ちに、自分の手に引受けて、氏獨得の方法で教育して行つた。恒君は講談社の少年團の隊に加へられ、さうして現在、雑誌發行の複雑な事業に關し、營業部編輯部の兩方から訓練されてゐる。父君同様に、恒君は擊劍が上手であり、文章家としても演説家としても將來を矚目され、社内に於て非常な人氣を博してゐる。(終)

昭和三年四月二十日發行  
昭和三年五月十一日再版  
昭和三年七月二十日參版

(非賣品)

不許  
複製

編輯兼  
發行人

東京市本郷區駒込坂下町四十八番地  
淵田忠良

印刷人

東京市小石川區久堅町一〇八番地  
君島潔

印刷所

東京市小石川區久堅町一〇八番地  
共同印刷株式會社

發行所

東京市本郷區駒込  
坂下町四十八番地

大日本雄辯會講談社

終

